



学友A

南海部 覚悟

長良川の水面に昼下がりの陽光が反射して、路面電車の天井が揺らいでいる。

茹だる暑さの中、満員の車内の空気も、沸騰していた。

忠節橋の巨大な鉄骨アーチを渡り終ると、電車は大きく左にカーブを切る。

カーブしたその先には、今乗っているこの電車同様スカーレットと白のツートンカラーの路面電車、モ510形が停車していた。

今までは、岐阜市内線（軌道）で、これから2両連結して専用鉄道の名鉄揖斐線に乗り入れる。

「前に乗り移ろう！」

例によって学友Aに促される。

ここ名鉄忠節駅で大半の乗客が降りてしまうので、先頭車両の運転台直後の席に乗り移るのは、さして難しいことではない。



中学校の学友Aは鉄道オタクである、それも名鉄揖斐線・谷汲線専門の鉄道オタクだ。まだ（オタク）という日本語が現に存在しない時代であるから、多少違和感はあるが、父親が名鉄電車の運転士をしていた、自宅も当該路線の沿線にあった、2階の子供部屋のすぐ下を当該電車が往来していたのである。

夏休み直前の学校の授業をサボって、この日岐阜市に出向いたのには、二人其々の理由があった。

一人は徹明町の映画館で、この春封切られた（ミクロの決死圏）というアメリカ映画を観るため、もう一人は実にこの路線の往復乗車を楽しむためである。

この日（ミクロの決死圏）の上映最終日であった、夏休み前で市内歓楽街の補導監視もまだ甘い、二人の家族が同時に留守をする偶然も重なって、この日をおいて決行する日はなかった。

朝、病欠の連絡を学校に入れて、通勤・通学が一段落した午前10時発の電車に、最寄りの黒野駅から乗車した。いつになく風の強い朝だった。

映画の内容は、当時人気を集めていたアメリカ製のTVドラマ（宇宙家族ロビンソン・原潜シービュー号・巨人の惑星）などと同列で、人の体内に注入されたミクロの潜航艇

のキャビンや、人体内部のスタジオセットが主な舞台となるSF映画である。

当時（原潜シービュー号）の（フライング・サブ）のメカデザインに夢中であった私としては、映画のセットデザインに大いなる興味があって、ストーリーは二の次であった。

帰りの市内線の中で、学友Aと議論になった。

「浮力不足になった潜航艇が、患者の肺で空気を供給するけど、ミクロ化されていない空気を吸って大丈夫なんだろうか？」

「結局、白血球に襲われた潜航艇が、患者の体内に残されたけど、その残骸が1時間たって元の大きさに戻ったら、どうするんだろう？」

「人の体内があんなに明るい訳がない。もし暗ければ、潜航艇のキャビンにある大きな窓に意味が無い。」

「潜航艇のデザインも、角や突起が多すぎて、まるで甲殻類だ。あれじゃ人の体内であっちこちに引っ掛かって、うまく航行できないだろ。」

「やっぱり、メカのデザインはサンダーバードに敵わない、2号の前進翼が最高だ！」

「1号の可変翼も捨てがたい、でも最高はフライング・サブだ！二つあるジェットエンジンノズルに挟まれたハッチを開けて、人が搭乗するんだぜ！」



忠節駅を出発した急行モ510形重連は、近ノ島、旦ノ島と通過し、尻毛に停車、又丸、北方東口を通過して、北方千歳町、美濃北方と停車する。

——尻毛駅に又丸駅である！更にその先には真桑駅、下方駅と続く、その当時は気にも留めなかったが、今になって振り返ると、珍妙極まりない駅名ではある。

密集した住宅地が、広大な田園地帯に替わり、更に柿の木畑が連続する果樹園にとって替わると、二人の自宅が在る（揖斐郡大野町）が近くなる。

猛暑日の昼下がり、灼熱の大気が旋風となって、果樹園のあちこちで渦を巻いていた。根尾川橋梁へと続く上り坂に差し掛かった辺りから、学友Aが前の運転席を盛んに覗き込むようになった。

「どうした？」

「——運転士の様子が変わんだ。」

当時のモ510形は、1列と2列の、3列並びクロスシートだった。

2列シートの窓際に陣取った学友Aが、シートから腰を浮かせ、両手をメガホンにして運転士に声を掛ける、
運転士はピクリとも動かない。

「いかん！大変だ！」

私の膝を飛び越えて、通路に飛び出した学友Aが、大声を出しながら運転席に廻りこむ、抱き上げた運転士の体が、ゆらりと床に倒れ込んだ。

「マスコン！マスコン！ノッチオフ！」

見ると、運転席のマスコンハンドルに、倒れた運転士の腕が絡んで、手前に固定されて外せない、電車のスピードはフルノッチで急速に加速し始めた。

異変に気が付いた数名の乗客が運転士の体を抱え上げ、腕をマスコンから無理やり外す、その隙に学友Aが運転席に滑り込みマスコンハンドルをノッチオフ。

根尾川橋梁を渡り切り、長い下り坂に差し掛かったモ510形は、それでも容易に減速しない。

「ブレーキ！ブレーキ！」

誰かが大声で叫ぶ。

「だめだ！ここで機械ブレーキ使うと非常ブレーキになる、車輪がロックして粘着を失う、カーブで脱線しかねない！」

学友Aは冷静だった、ノッチオフによる発電ブレーキを主力に、ブレーキ弁ハンドルを微妙に操作しながら、少しずつ電車の速度を落としていった。

「空気圧が無くなったら、コンプレッサーの加圧が終わるまで、機械ブレーキが使えない。直ぐに止めるのは無理だ！」

この時代電車の機械ブレーキは、主ブレーキ管の常時加圧空気を排気減圧することで、補助空気溜の高圧空気をブレーキシリンダーに導入し、踏面ブレーキを作動させる。だからブレーキ弁を頻繁に操作すればするほど、ブレーキ管や空気溜の圧力が下がり、コンプレッサーの再加圧が終わるまで、ブレーキの利きが悪くなる。

自動車のエンジンブレーキに当たる発電ブレーキに頼るしかなかった。

（ここで一つ疑問が残る、大抵の鉄道車両は、運転士に心臓発作等の異常が発生した折、自動的に緊急ブレーキが掛かる仕組みになっている。デッドマンブレーキと称すが、気を失った運転士がマスコンハンドルから手を離すことによって、ハンドルがスプリングで跳ね上がってブレーキが作動する。今回運転士の腕がハンドルに引っ掛かり、乗客が無理やり外した直後に学友Aがノッチオフしたので、作動しなかったのかも知れ

ない。)



柿の木畑の中の、無数の踏切を通過しながら、電車は黒野駅に近付いてゆく。イコライザー（釣り合い梁）式ボギー台車は、畑を突き通す長い直線区間にも拘らず、例によってヨーイングが大きい。果樹園の中の所々に、電車の乗客を対象にした酒造メーカーの野立て看板が並んでいる。旋風が相変わらず、砂を巻き上げ、柿の木の枝を揺らしていた。



2本のレールと、架線によって構成されるパースペクティブの遙か前方から、建設中のビルの大きな仮設足場が近付いてきた、折からの旋風に養生ネットが大きくはためいている、部材の一部が脱落したように見えたその直後！——頂上部分の端から、金属製の足場が捲れるようにビルから剥がれ、線路に向かってゆっくりと倒れ掛かる。

「ブレーキ！ブレーキ！」

「いや間に合わない！フルノッチ！」

悲鳴が車内を満たす、大きく揺動した架線から無数のスパークが発生する。

急加速したモ510形は間一髪仮設足場の直撃を免れた、直後に車内が停電し非常用ランプが点灯する。

振り返った学友Aが乗客に向かって大声を出す。

「黒野駅はもう目と鼻の先です！このまま惰行して既定の到着番線に停車させます！

」

架線の停電で動力を失ったモ510形は、ゆっくりと惰行して大きく右にカーブを切り、黒野駅に進入してきた。

2か所ある分岐ポイントも支障なく通過し、後はブレーキ弁を操作して、停止位置に停止させるだけだった。

圧力計は赤い帯の範囲内で、元空気溜の圧力が正常であることを示している。

「ここから先が、電車の運転で一番難しい・・・。」

脇に立つ私の眼を見ながら、学友Aが悪戯っぽく呟いた。

そういえば彼は、父親が運転する様子を運転席の背後からずっと見ながら育った。誰にも言うなと口止めしつつ、小学生の頃、黒野駅の構内で父親に促され、実際に運転席に座って電車を動かした経験を話してくれた。

谷汲線沿線の彼の部屋には、難解な鉄道技術の専門書が、本棚の過半を満たしていた。



進入番線を正面に見ながら、ブレーキ弁ハンドルをゆっくりと（運転）位置から（常用ブレーキ）位置に持ち込む、プシューというブレーキ管の排気音が聞えると車体に明瞭な制動が掛かる、ハンドルを（重なり）位置に戻すと制動が解除され、それでも弱いブレーキが掛かり続ける、停止目標が近づいてきて一瞬（常用ブレーキ）から再び（重なり）へ、ホーム上屋下の停止位置目標を顔の真横に見る状態で、モ510形重連は完全に停止した。

思わず背後から、一斉に歓声と拍手が湧き上がる。

戸袋の楕円の窓から、心配そうに駅員が覗き込む、ドアが開いて乗客が降りてゆく。

倒れた運転士は駅に常備された担架に移され、車外へ運び出された。

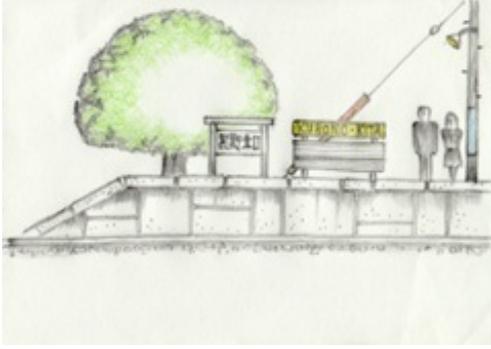
運転席の学友Aを、ぽかんと見ていた駅員が呟いた。

「君が、運転してきたのか？」

「はい！」

「よくやってくれた、有難う！」

大らかな時代だった。



天井から下がる中吊りポスターの端に、蝉が一匹とまって甲高く啼きはじめた、丸い桜花のシンボルマーク・・・大阪万博の公式ポスターだ。

1968年7月、アポロ11号月面着陸の前年、大阪万博前々年の暑い夏の些細な出来事だった。

名鉄揖斐線・谷汲線に関しては、谷汲線が2001年10月1日、揖斐線が2005年4月1日を最後に、其々廃止された。モ510形は岐阜県内に静態保存の3両が残るのみである。

学友Aはその後、岐阜市内の普通科高校から、東京の工学系の大学に進んだ。

関西の大手私鉄に就職し、鉄道技術者として働き始めたが、三十路を直前にして交通事故で亡くなった。

鉄道事故でなかったのが、せめてもの慰めではあるが、まだ独身で、過半の喜びを残したままの人生だった。

担架で運ばれた運転士は、迅速かつ適切な手当てにより一命を取りとめた。

半年後復職したが、その後の消息は分からない。

記憶に任せて廃線跡を辿る、舞台となった名鉄黒野駅は、町営のレールパークとなっている。

展示された写真パネルに、往年の私鉄駅の活気が甦る、そよぐ風に遙か昔の香りを漂わせるのは、今も変わらぬ柿の木だけだった。

おわり。

以上、フィクションです。悪しからずご了解ください。

学友A

<http://p.booklog.jp/book/114338>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/114338>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト